

No. 1099

いわれなき殺人

— 被害者補償制度を促進する会 —

殺人、その発生件数は年間1,500件を超えるという。その被害者家族は、どのような生活をしているだろうか。横浜市鶴見区生麦町1336番地に住む、市瀬朝一さんも被害者のひとりだ。一人息子の清さんを若い男に腹を刺されて失った。「親父、くやしい」と言い残して死んだ息子、そのくやしさを思い「犯人を一突きに刺して私も腹をかき切ろうと何度も思った」という。損害賠償を請求しようにも犯人に賠償能力がなく、さらに国が肩代りする制度も、遺族の生活を補償する道もない。何も手につかない日々の中で、「泣くだけではいつまでたっても救われない。国に補償制度をつくらせよう」と思いたった。新聞記事をたよりに殺人事件の被害者をたずねまわること8年、昨年9月市瀬さんを会長に「被害者補償制度を促進する会」の全国組織が発足した。市瀬さんの手元には被害者家族から毎日のように悲惨な手紙がよせられている。

すでに外国では制度化されている国が多いという。法務省藤永幸治参事官は、補償制度の立法化について「現在、被害者家族の実態調査の準備中、その調査が終わらなければ……」という答え。

2月2日「被害者補償制度促進大会」が東京で開かれた。各地から55家族が集まり、苦境を訴え、政府に国家補償をするよう要望書を決議した。しかし、被害者補償制度が立法化されたところで、さかのぼって適用されることは難しいという彼等の運動は将来への捨て石でしかない。

ひとつの犯罪が残すつめあとはあまりにも重く、深い。